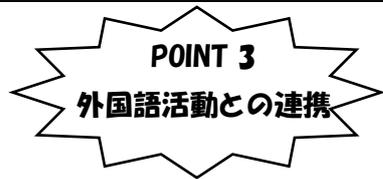


外国語活動・英語科実践② 中学校 第1学年 Unit 7 ブラジルから来たサッカーコーチ 全8時間

目標 小学生に理解してもらえるような工夫を取り入れて、中学校生活を紹介する。

時	学習活動の概要	指導上の留意点
1	<p>(ねらい)疑問詞 who を含む文の構造を理解し,使えるように練習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> •教師のモデルを見て,本単元で身に付ける技能や内容を知る。 •本単元で身に付ける技能,行うタスクを知り単元の見通しをもつ。 •教科書 Unit 7 Part 1の学習を通して who を含む文とその応答の仕方を理解する。 •人物紹介クイズをペアで行う。 	<p>○単元のゴールを単元の最初の段階に提示することで,単元の大きな目標を意識して学習することをねらう。</p> <p>○人物紹介クイズで有名人だけでなく中学校に勤務する人の写真を取り入れることで単元の終末課題で利用可能な表現(人物のたずね方・答え方,教科について等)の習熟を図る。</p>
2	<p>(ねらい)what + 名詞を含む疑問文の構造を理解し,使えるように練習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> •前時に学習した表現をもちいてペアで対話する。 •教科書 Unit 7 Part 2の学習を通して what + 名詞の疑問文とその応答の仕方を理解する。 •副教材 Talk & Talk で練習する。 	<div style="text-align: center; border: 2px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>POINT 1 即興性のある帯活動</p> </div> <p>○既習の what を含む疑問文の発展形であることや what + 名詞は日本語の語順と同じ感覚であることに気付けるような文例を示す。</p> <p>○学年が上がってからも間違いやすい語順の文型であるのでパターンプラクティスの時間を十分確保したい。</p>
3	<p>(ねらい)疑問詞 which を含む文の構造を理解し,使えるように練習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> •前時に学習した表現をもちいてペアで対話する。 •教科書 Unit 7 Part 3の学習を通して which を含む疑問文とその応答の仕方を理解する。 •Picture Talk で練習する。 	<p>○選択肢が示されている場合のたずねかたと具体物についてたずねる場合では用いる疑問詞が異なることを理解できるようにする。</p> <p>○示される写真(絵)を見て,which を含む疑問文でたずねることと自分の意見をもって話すことができるようにする。</p>
	<p>(ねらい)一日の生活について英語で紹介できるように練習する。</p>	

4	<ul style="list-style-type: none"> 教科書 Presentation 2 の学習を通して、日常生活の表現の仕方を理解する。 	<p>○起床から就寝までのすることを既習の疑問詞を用いて授業者が生徒にたずねながらそれぞれの表現を導入する。</p> <div style="text-align: center;">  <p>POINT 2 教材との再会</p> </div>
5	<ul style="list-style-type: none"> 時計を使ってお互いに一日の生活について紹介し合う。 	<p>○生徒がお互いにインタビューし合うことで前時に学習した表現の確認と、疑問詞を含む疑問文の定着をねらう。</p>
(ねらい)小学生に理解してもらえるような工夫を考える。		
6	<ul style="list-style-type: none"> 小学生からの手紙でこれまでの課題への感想や、今後のリクエストを知る。 行事や授業を紹介するビデオのためのアイデアを練る。 小学生に興味をもってもらえるような話し方の工夫を考え、グループ内でデモンストレーションをする。 	<div style="text-align: center;">  <p>POINT 3 外国語活動との連携</p> </div> <p>○グループ内でデモンストレーションする際に、自分達の考えた工夫がどれだけ入れられたかどうかを確認することで、相手意識がより明確になる。</p>
7	<ul style="list-style-type: none"> 絵コンテを作成し、役割分担をする。 対話の練習をする。 	
(ねらい)中学校生活について小学生に紹介するビデオを撮影する。		
8	<ul style="list-style-type: none"> 既習表現等を用いて、小学生に中学校の行事や授業を紹介するビデオを撮影する。 <ul style="list-style-type: none"> リハーサルをする。 校内で撮影する。 各班のビデオを視聴してコメントしあう。 	<div style="text-align: center;">  <p>POINT 4 目標とふりかえり</p> </div>

～ポイント解説～

POINT 1 即興性のある帯活動

学習者が「英語ができるようになるといいな」と思うのはコミュニケーションの場面、つまり「やり取り」の力をつける必要性を想定するのではないだろうか。コミュニケーションでは即時的なやり取りが必要とされることが多い。学習者自身が既習の知識を総動員させてなんとか相手に伝える努力をする必要がある。その場で考えて話したり、相手が話したことについて反応したりする即興力は普段から学習したことを試みる場面を意図的に設定しなければなかなか身に付いてはいかない。そこで、身近な話題についてのスモールトークや、示された絵や写真について描写したり相手にたずねたりするピクチャートークを継続して行った。また、生徒同士での対話だけでなく、生徒と授業者あるいは生徒とALTでの対話の機会を設けた。相手が理解しているかどうか確かめたり、自分が正しく理解しているかどうかを聞き返したりする表現がモデル



となり、次回の対話でより豊かなコミュニケーションが実現されることを期待した。

この活動では相手意識も重要となる。相手によって何をどのような方法で伝えればよいのかを考えながら話したり、自分が伝えようとしていることが相手に伝わっているのかを確かめたり、相手が自分に何を伝えようとしているのかを理解しなければコミュニケーションは成立しない。相手に自分の伝えたい内容を理解してもらうために、自分がどのような語彙や表現を選択するかという相手意識である。またノンバー

バルな工夫も有効であろう。こうして日々の活動で身に付けたコミュニケーションの力は単元の終末活動でも相手の理解を助けるための工夫として多く使われた。

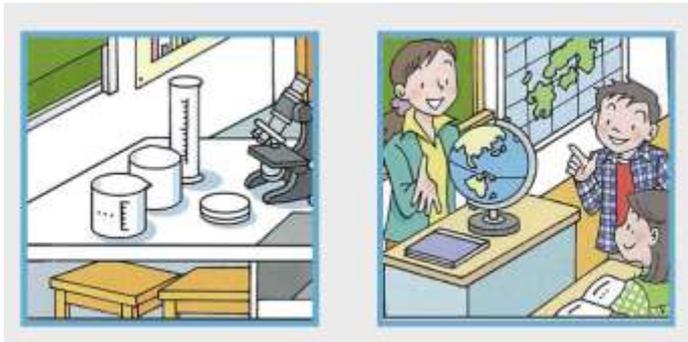
POINT 2 教材との再会

多くの小学校が、外国語活動で *Hi, friends!* 1・2を使用している。中学校の授業において、基本文の導入や授業中に図示する教具として *Hi, friends!* は有用であると考えられる。本単元に関して、*Hi, friends!* と *New Horizon 1* で基本となる表現が次の表のように対応している。

主な表現	New Horizon 1	Hi, friends! 2
Who is this?	Unit 7 Part 1	Lesson 7
What time is it?	Unit 7 Part 2	Lesson 6
Which do you ~, A or B?	Unit 7 Part 3	
I get up at six.	Presentation 2	Lesson 6

中学生になると、楽しく活動していた「英語」が学習になるということで、英語の学習や授業に対して必要以上に身構えてしまう生徒も少なくない。しかし、小学校で慣れ親しんだ教材との再会が生徒の学習に対する

バリアを軽減することに役立つと考えた。そこで *Hi, friends!* の絵を帯活動のスマールトークやピクチャートークで使用した。左図は *Hi, friends!* 1 Lesson 7 「クイズ大会をしよう」の絵である。このような2枚の絵を示すことで、Which do you like, science or social studies? という文から対話をスタートさせるペアが自然と多くなった。以下は上の2枚の絵を示した授業



におけるピクチャートーク中の生徒の対話である。

生徒 A: I like science. Which do you like, science or social studies?
 生徒 B: I like social studies. It's interesting.
 生徒 A: I see. Which do you like, history or...? なんだっけ、地理...?
 生徒 B: えー? 地理?
 生徒 A: えーっと、(黒板の絵を指差して) Which do you like, history or that?
 生徒 B: I like history.

生徒 A は絵を見て2つの教科のどちらが好きかたずねたあと、生徒 B の返答に合わせてさらに質問を続けている。しかし、両者とも地理という英単語がわからないが、黒板上の絵を示すことで何とか英語で対話を続けている。知っていることや相手と共有している情報を駆使してコミュニケーションの継続を図る姿勢

が生徒に身に付きつつあることがうかがえる。



Presentation 2 では起床から就寝までの日常生活の表現の仕方を学習した。ここでは、生徒にとって見知った絵を示したことで日本語の介在なく連語などを導入することができた。

本校には毎年 20 校以上の異なる小学校から生徒が進学してくる。附属小学校出身の生徒だけでなく、どの小学校出身の生徒も共通の体験をしているということは、学習への安心感を生むと考える。

POINT 3 外国語活動との連携

英語を学習し始めてからおよそ半年が過ぎた中学1年生には、英語で何かを表現する際に、自分の英語はきちんと相手に伝わるのだろうか(理解してもらえるのだろうか)という不安や期待がある。そこで、英語を学習していて中学校生活に興味をもっていると考えられる小学生を英語で伝える相手に設定した。本学年の生徒は附属小学校の児童に向け、Unit 5 では中学校で学習する教科について、Unit 6 では中学校に通う・勤める人物紹介を行った。小学校外国語活動でどのようなことに親しんだかを経験して知っている中学生にとって、どれくらいの語彙・表現であれば小学生は理解できるかを推測することは難しくない。そして、どのような工夫が小学生には有効であるかを考えることも可能であると考え。

小学生に英語で伝える活動を通して、小学生は「中学生になったらこんなことをするんだ」「中学生のように自分も〇〇できるようになりたい」という見通しや自分の願いをもつようになる。また、小学生からのコメントが中学生には英語学習へのさらなる意欲付けやふりかえりの材料となる。年間指導計画を小学校と中学校で共有しておくこと、お互いの単元構成を知ることで継続的な連携や生徒の成果物を外国語活動で活用してもらうことも可能であろう。

POINT 4 目標とふりかえり

単元目標と毎時間の目標を示し、それを毎時間振り返ることは生徒の主体的な学びにつながると考える。本学年の生徒には毎学期の初めに各単元の学習目標とその達成のための大まかな学習活動を示している。そして、各単元の学習開始時には毎時間の目標を示し、さらに授業を経て「できたこと・わかったこと」「できるようになりたいこと・困ったこと」を記すことのできるふりかえり用紙を配布している。毎時間の授業の終末にふりかえりを書くことでその1時間で理解できたことや終末課題の達成に必要なことがどれくらい身に付いたかを生徒自身が考えることにつながる。そして、「できるようになりたいこと・困ったこと」を記すことは今後どのようなスキルや知識が必要であるかを考えることになる。さらに、個人が感じている「できるようになりたいこと・困ったこと」を取り上げ、授業中の課題として提示することによって学級全体の学びが広がりを見せる。

また、授業中の活動についてもふりかえりをするのは生徒の主体的な学びにつながると考える。本単元では小学生に中学校について紹介するビデオを制作することを終末課題とした。撮影の機会は1回ではあったが、①マッピング後②アイディアを練った後③リハーサル後の計3回のデモンストレーションを行った。それぞれのデモンストレーション後に相互評価をした。自分が伝えようとしたことが相手にどのように伝わったか、小学生向けに工夫した点はわかりやすさにつながったかという視点でふりかえりを行った。このグループ単位での活動のふりかえりを学級全体で共有することで、「小学生にはこんな表現したら伝わると思う」「あの班がやっている工夫は自分たちの班でもできそうだ」という思いにつながる。それが「もっと多くのことを

伝えたい」という主体的な学びにつながっていくと考える。

成果と課題

「深い学び」を実現するために、外国語活動・英語科では次の3点を手立てとしている。

- (1) 相手意識や目的意識が明確になる単元構想の工夫
- (2) 既習事項を用いて「その場で考えて伝え合う」活動の設定
- (3) 主体的な学びにつなげる見通しとふりかえりの工夫

本単元の実践についてそれぞれの成果と課題を挙げていきたい。

(1) 相手意識や目的意識が明確になる単元構想の工夫

小学校外国語活動で「英語の音」に慣れ親しんできた生徒に実際に「英語でやりとりする」機会をなるべく多く提供したいと日頃から考えている。日本で生活し、生活に必要な言語を習得している生徒にとって、英語の学習は生活のために必要な言語ではない。英語でやりとりをする必然性のある場面設定を行うことは先述のような実態のある生徒を対象に行っていくことが難しい。必然性のある場面設定を毎回の英語の授業で行うことは難しくても、英語で伝えることに意義がある対象を相手とした単元のゴールを生徒に示したいという願いを満たすのはどのような相手がよいかということを考えてきた。そこで本単元を含め、2学期の各単元では、伝える相手を小学生に設定した。生徒にとって身近な相手であるため、相手意識・目的意識を明確にもつことができた。異校種・異学年交流は中学1年生にとってよい『腕試し』の機会となった。しかし、情報伝達という点で、母語でのコミュニケーションに勝ることはない。「なぜ英語で伝え合う必要があるのか」がより自然となる場面設定を授業者が練っていくことで生徒により明確な相手意識・目的意識をもたせることが可能になるだろう。

(2) 既習事項を用いて「その場で考えて伝え合う」活動の設定

新出表現の学習後、生徒同士が短時間で対話することを常活動として行ってきた。テーマを与えて行うスモルトークや、黒板上に示された絵(写真)を見て話すピクチャートークなど、様々な形式で対話活動を行ってきた。代表生徒と教員の対話を聞くことで、基本となる表現だけでなく、つなぎ言葉や相づちの表現などを生徒は知ることになり、それをのちの活動で利用することも可能である。生徒は回を重ねるごとにやり取りの内容が充実していった。継続して行うことで対話の力は付くと考える。このような力は学習指導要領でも「話すこと[やり取り]」の目標のひとつとして新設されているので今後も継続して指導をしていく必要がある。ただ、実際の授業中のやり取りを見ていると生徒同士の対話はノンバーバルな情報を頼りに理解合っている面も少なくない。既習事項を自身の表現したいことのために自由に使いこなせる生徒の育成を目指していきたい。

(3) 主体的な学びにつなげる見通しとふりかえりの工夫

本学年の生徒には、毎学期の初めに各単元の学習目標とその達成のための大まかな学習活動を示してきた。そして、新しい単元の学習が始まる時には、生徒が単元全体の見通しをもてるように、①教師のモデルを見て、その単元で身に付ける技能や内容を知る。②その単元で身に付ける技能・行うタスクを知り単元の見通しをもつ。を意識して行ってきた。また、毎時間の冒頭でその授業の目標と授業の流れを示し、終末にはふりかえりの時間をとってきた。単元のふりかえりシートが学習の軌跡として蓄積されていくので、生徒自身で何ができるようになったか、どんな力がついたかを振り返ることができる。それを見て、生徒が「○○できるようになったから、次は□□できるようになりたい」「次の単元では◇◇してみたい」と次の学習への願いをもつようになるだろう。どのような単元の目標を設定するか、ふりかえりにどのような視点を与えるかが生徒の主体的な学習に与える影響は大きい。生徒の実態を見極め、1年間だけでなく、中学校修了までを見通した目標を設定していくことが重要である。(岩崎香織)